

Support for **Woman Doctors** ～私からあなたへ～

「京都北部より」

吉岡 美香 先生【長野県 25期】

よしおかクリニック

お子さんは11歳、5歳、2歳(双子)の4人



京都府京丹後市。海に面し自然豊かなこの地で、2年前に開業した夫とともに日々診療を行っている。夫は同じ自治医大の同級生で京都府出身、現在は整形外科を専門としている。義務年限内から続けてきた病院勤務での限界を感じたようで、地元でのクリニック開業に至った。私は内科医として、外来と内視鏡検査を中心に仕事を続けている。

内科医として働こうというのは学生時代から決めていた。理由として、単に外科的処置が苦手なのもあるが、ベッドサイド実習の頃から消化器内視鏡に魅力を感じていたのが大きい。長野県出身であったため、卒後の研修は自治医大でのローテート研修であった。ちょうどその頃の自治医大消化器内科はESDや小腸ダブルバルーン内視鏡検査といった現在では一般的になった治療や検査が始まった時期であり、フロンティアである先生方を身近に感じさせてもらいながら研修を行うことができた。その熱量を自分なりに引き継ぎながら、3年目以降は長野県の一般病院で実際に診療にあたることとなった。

初期研修終了時に結婚したため、夫とともに長野県での生活が始まった。職場も常に一緒であったが、科が違うのでお互い神経質になりすぎることはなかった(と思う)し、仕事内容や忙しさなどもわかるので、メリットの方が多かったと感じている。

長野県での勤務期間内に長女を出産することになり、里帰り出産を選択した。産前産後とも大変のんびりと過ごしたため職場復帰には戦々恐々としていたが、復帰の際にも配慮をいただき、健診業務を週に数回といった実に現実的な働き方から仕事を再開できた。今考えても大変寛容な職場であったと思う。

義務年限後半は1歳児を連れて京都府へ。今後京都

で勤務していくにあたり、夫とともに京都府立医大に入局した。夫は整形外科、私は消化器内科である。大学病院の洗礼を1年間受け、一般病院との違いを良い面・悪い面とも少しは実感することができたと思う。大学病院勤務をしているとどこでもそうだと思うが、特に夕方から夜にかけてミーティングだカンファランスだ勉強会だと曜日毎の集まりがとて多い。そのため子どもの面倒を自分達だけでみることは残念ながらほぼ不可能である。幸いなことに、義母に隣に住んでもらい、保育園の送迎や食事の準備までお願いできるという、大変恵まれた環境で勉強することができた。今でも義母には子どもの世話などで日々助けてもらっている。やはり夫婦とも働いていると、祖父母やベビーシッターなどの助けがないと子育てはなかなか難しい。

その後、次女が生まれ、2年前には双子の男の子が生まれた。双子を妊娠している時のお腹の大きさといったら我ながら驚愕するほどであったが、その話を始めると脱線著しいのでやめておく。妊娠中も勤務していた市立病院には勤務内容等で色々とお世話になり、予定出産の直前まで外来などで勤務することができた。やはり仕事をしていたほうが体調はよく、体重が増えすぎて鬱々とするのもない。ちょうど夫が始めるクリニック開業日の4日前に予定帝王切開となり、新しい家族と新しい職場とを同時に得ることができた夫は幸せ者であろう。

現在は勤務医の頃よりも時間の融通が利くため、仕事の合間に家事をこなすことができるのが嬉しい。仕事終わりの憂鬱(子どものお迎えからの夕食準備、洗濯物の片づけ、お風呂・やること山積み...)が少なくてすむ。これから子ども達が成長し手が離れてくると自分の仕事に費やす時間がまた増えてくると思うが、今のところは私生活で後悔しないよう、日々楽しくすごしていきたいと思っている。

後輩医師・学生へ一言メッセージ

『目標を持って一直線って憧れます。でも、その時々で自分が良いと感じる選択をしていくと、想定外の楽しい未来が待っているかも。』

「自治医大卒業生 女性医師支援 NEWS」では、読者の皆様からのご意見をお待ちいたしております。特集記事のテーマ、絵本やその他のコーナーについても、ご希望などあれば、是非お寄せください。
連絡先:自治医科大学 地域医療推進課 卒後指導係
E-mail : chisui@jichi.ac.jp